

巨樹いしかわ

1990

No.3

鹿島路のタブノキ 昭和三十六年十月十六日(羽咋市指定)

羽咋市鹿島路町 管理者 鹿島路町会
幹周九・八メートル(日本一のタブノキ) 樹高二〇・〇メートル



目次

表紙 鹿島路のタブ……………1

巨樹幻想……………粕野 義夫…2

藤塚神社の巨樹礼讃歌……………小倉 学…3

ヤブツバキの巨樹と天然記念物…里見 信生…4

適地適木調査と植生……………井幡 清生…5

庭の中の国宝 — 兼六園 — ……下郷 稔…6

珠洲市指定天然記念物……………7

巨木を語ろう全国フォーラム……………8

巨木フォーラムと探訪会に参加して

巨木を守る心に感激……………宮腰はま子…10

巨樹探訪(Aコース)……………上保 楨子…10

巨樹探訪(Bコース)……………半部 直三…11

鹿島の森とタブノキ……………永島 治…11

十村屋敷跡のスタジイ巨木群…中池 四郎…12

幻の樹木物語……………長谷川義法…13

春の山祭りに思う……………唐川 明紀…13

巨樹のQ・A

— 松を枯らす恐ろしい

マツノザイセンチュウ…向本 欽覚…14

— 病害虫診断予備知識— ……松枝 章…14

また見付かった巨樹(3)……………林 正…15

巨樹の会だより……………15

総会の概要・巨樹の会日誌……………16

(題字 里見信生)

巨樹幻想

鮎野義夫

気付 くのが、いささか遅すぎたのである。定年を迎えたあとの、何としない空白の時期に、たまたま

「巨樹の会」の発足を知り、縁あって入会させていただいた。今もって私には、巨樹についてのさだかなイメージは定着しておらず、まして「巨樹を語る」などは鳥辭がましい限りである。「自然科学」をやっている者のはしくれとして、自然の歴史だの、自然環境の保全だのについて、多少の考えや意見を抱いてはいるものの、それは多分にまだ観念的なもので、決して身についたものではないことを、近頃つくづく反省させられることが多い。

巨樹 についての、いわば「思想」がもてないでいるのは、ほんとに巨樹に深く感応した経験がうすいからである。さして深い意味なしに、ただ巨樹を仰ぎ見、その偉大と尊厳に敬虔の念を抱いたことはある、しかしそれ以上に深く感応し、感じ入り考えることなしに、言わば通り過ぎてきてしまったのである。人生のラストコーナーにさしかかって、いささかの余暇をもつことができ、過ぎ来し方をふりかえって見た時、

忘れたものを思い出すかのように、改めて巨樹の存在に今一度気づいたという次第である。

人の想念 や思想、ものの感じ方や考えかたの基本は、おそらく幼児期におよそ形作られるものであろう。素漠たる砂丘の上の漁村で生まれた私にとって、大樹らしきものといえば、寺と氏神の社の境内にあった、イチヨウとスギ、マツくらしいのもであった。

そのほか、生家の前の道をはさんだ真向いには、イチヨウの古木があった。生涯の間みずから写生を試みた唯一の大樹は、このイチヨウであった。子供の頃には、このイチヨウの古木の実を拾えたものだったが、その後、保護も手当もされぬまま、急速に衰えがはげしくなり、今では朽ち果てて見る影もなくなってしまうのは心のこりである。

歴史・由緒 の古い里山や、山深い森の中で生まれ育った人たちには、もっと豊かな森の思想、巨樹への憧憬が、深く心の奥底に植えつけられたにちがいない。そうした人々も、故郷の村や森からはなれて、近代化した都市砂漠の中に投げ

出され、土のにおいからも隔絶されて、森や大樹とはたまさかにしか出会えなくなってしまう。近代文明と称するものの浅はかさ、はかなさに気づいた時に、人間存在の根っ子にある森や林と、そのシンボルである故郷の巨樹・巨木に、今一度思いをいたす人は多いことだろう。

話 かわるが、地質学というものをやっている私には、大昔の生きもの、化石となって残っているものは、いわば「飯の種」である。

私も貝類や哺乳類など、幾つかの動物化石を手がけたことはある。しかし、植物や植物化石についてはほとんど知識がなく、植物オンチである。それでも観念の上では、植物化石から太古の森林を想像するという、あぶない芸当をやってみることもある。だが悲しいかな、ほんとうの生きた森を知らず、巨樹たちに感応した経験のない者にとっては、生きた森を構想することはついに不可能である。化石の断片という浅薄な知識だけでは、森の息吹きを再現することなど、所詮は覚束ない仕儀と相成るのである。

私たち の身近には、地質時代の森林の復元に役立つ貴重な素材が、少くともふたつはある。ひとつは、一億年あまり前の、「手取の森」である。さまざまの恐竜化石

(の破片)で近年再び脚光を浴びている手取層群の化石(動物・植物)の研究を総合して、この時代の森と湖と恐竜たちの生きざまをおさめた、一幅の太古の幻想画を、いつの日か描いてみたいものである。この森に亭々とそびえ立つ巨木は何だろうか。

いまひとつ は、第三紀中新世(一七〇〇万年前ごろ)の

亜熱帯型の森林である。加賀や能登の火山灰層の中に埋もれている、さまざまな樹木の珪化木こそ、この森林の主役たちの証跡である。兼六園夕顔亭の手洗鉢となっているヤシ類も、この森の忘れてはならない構成員である。この時代の亜熱帯林(当時日本海沿岸にひろがっていた)は、一億年あまり前の「手取の森」とはちがってその樹種構成は現在の地球上の亜熱帯林にきわめてよく似たものであったろう。

遠い過去 の樹林もさることながら、

私たちにあって大切なのは現在の森林であり、生きている巨樹たちである。この貴重な存在に、どう接していくのがよいのか、私たちに何かできることがあるのかどうか。こうした問題は幻想などではなく、現実の課題として浮かびあがってくる。巨樹たちを今いちど見つめ、衆智をあつめて行動にうつす時期のようだ。(かせの・よしお 地質学者)

藤塚神社の巨樹礼讃歌

― 岡本大無の連作秀歌 ―

小倉 学

白山 源を発する手取川が日本海に注ぐ河口に発達した美川町は、もとは本吉とよばれて繁栄した港町で、明治初年には石川県庁の所在地となったこともある。この美川町の総領守と仰がれてきたのが藤塚神社で、町の南端、手取川近くに鎮座する。山王社ともよばれた古い大社で、五月には、おかえり祭りといわれる盛大な行事があり、十三基の台車が町内をねるので有名である。初夏、社地の北側から鳥居と山門



とをくぐると、昼なお暗いくらい老木や巨樹の繁る境内だ。樹間をすかして左前方に宏壮なる拜殿、左手の奥には末社の金刀比羅社が見える。その中間に蟠踞してそそり立つのが神木のケヤキとエノキである。圧倒されるような靈気に、思わず立ちどまって見あげるのは私だけではない。

この神木を見る度に思い出されるのが歌人の岡本大無がよんだ巨樹礼讃の連作歌である。『美川町文化誌』（昭和四十四年、美川町役場発行）によれば、大無は京都の人で本名は経厚、明治十年（一八七七）、上賀茂社の祠官岡本家に生まれ、上京して明治法律学校に入学するとともに正岡子規に入門して作歌に専念し、学校卒業後は京阪地方の新聞界で活躍した。昭和二十三年から五年間、三女の美也子が嫁した美川町の任田家に身を寄せ、歌誌『黒百合』を創刊して作歌の指導をした。しばしば藤塚神社を訪れ、「根柢盤屈、枝幹古怪、鬱として四辺を蔽」う巨樹の下を徘徊することが多かった。その感動が「巨樹礼讃」

と題する三十九首となり、昭和二十五年正月の賀頌として『黒百合』誌上に発表されたのである。

今まで、こんなにまで見事に巨樹をよんだ歌に接したことがないので、その中から八首をえらんで味読することとした。

- ① 是の木の樹態が醜す雰囲気をわが愛すらく今日も来てイッ
 - ② 地の面にふくれ瘤だち苔むせる蔽し木根株蔽のごとし
 - ③ 天地と共に氣息し天地と共に世を經るこれの大樹か
 - ④ 幹朽ちて空洞となれど百枝千枝大木の榎わか葉しみにみ
 - ⑤ 蔭ふかき大木のありて涼しきろ大山咋ノ神の斎庭は
 - ⑥ 却々に人とあらずは深山木になりてまじしもの物思はずして
 - ⑦ 老いてなほ若き意氣を失はぬ大樹の如く生きなむよ吾れも
 - ⑧ 今の世のさかしら人ら来てても見よこれの大木の蔽し木振り
- 右の ①は巨樹のকাশし出す雰囲気に心ひかれ、今日も訪れるという心境がよくよまれている。
②は巨樹の姿態を見事によんだ秀歌。③は天地とともに世を經てきた

巨樹に対する感歎である。④は朽損して空洞とはなったものの、巨樹がもつ生命力の偉大さを讃えた詠歌として、誰でも共感するであろう。

⑤の大山咋神は山王社とよばれた藤塚神社の祭神をさす。⑥の発想は万葉集の卷三にみえる大伴旅人のなかなか人にあらずは酒壺になりてしかも酒に染みなむ

などに倣ったものであろう。⑦はおそらく大無の心境と思われる。このとき大無は七十三歳だった。⑧は風雪に堪えてきた巨樹に対する礼讃の絶唱だといえようか。

ちなみに大無は昭和二十八年に美川町から京都に還り、十年後の同三十八年に八十七歳で永眠したという。（文学博士・石川県文化財保護審議会委員）

新・日本名木百選と県巨樹

名木の写真貸出しについて

新・日本名木百選（読売新聞社）と県巨樹名木百選（本会）の展示用写真をつくりました。写真はキャビネ版で約二百点、ユポ紙（縦一メートル、横二メートル）十枚に貼布し樹木名や大きさも記載されています。会員の方のイベントなどに貸出すことにしましたのでお申込み下さい。

ヤブツバキの巨樹と天然記念物

里見信生

本会は名称を「石川県巨樹の会」と申している。「巨樹とはどのようなものを言うか」と問われるが、「漠然と巨大な樹を指しているだけ」と答えざるをえない。

次いで「どれだけ大きければ、巨樹と言えるのか」と尋ねられても「判然とした基準はありません」と申し上げるばかりである。

しかし、昭和六十三年に、全国の巨木調査が環境庁で行われましたが、この時の調査の対象となりましたのは、地上1・3メートルの高さでの幹周が、3メートル以上のものとされしました。つまり、このあたりが、巨樹ということに定着するのではないかと思う。

そうしますと、イチヨウ・スギ・クスノキ・ケヤキなどの高木はこれではよろしいのですが、亜高木の樹種ではいかに樹齡を加えたものであっても、巨樹の範疇に入らない。まして灌木ではなおさらのことである。そこで、その実例として、ヤブツバ

キの全国における巨樹を表にしてみた。すなわち、第一位の群馬県甘楽郡甘楽町秋畑にあるもの他、三本は幹周三メートルを超えているので、環境庁の調査に取り上げられているはずですが、この表の最後の幹周一・七メートル級でも、ヤブツバキとしては間違いなく巨樹である。

巨樹の保護には天然記念物として指定することが、有効である。しかし、この指定も、どの位なら国の、また、県あるいは市・町・村の指定の基準になるか問題である。ヤブツバキではこの表で御覽の通り、幹周三メートル以上は真に稀有であることを考え、私はここに一線が引かれると思われるので、幹周三メートル以上は国指定の有資格のものとして判断して良いと思う。そうすると、県指定の資格はこれ以下となるが、この表の中に、既に県指定になっているものがあり、幹周一・七メートルあたりが線が引けそうで、これ等の県で、県指定に判断されたことは妥当であると思われる。

全国ヤブツバキの巨木一覽

順位	所在地	樹高	幹周	備考
一	群馬県甘楽郡甘楽町秋畑	八・三〇	三・九	県指定
二	岩手県大船渡市末崎町 熊野神社	一〇・〇〇	三・三	根元で六幹に分岐
三	富山県氷見市老合	一四・〇〇	三・四	県指定 樹齡七百年
四	愛媛県喜多郡内子町	一四・〇〇	三・二	
五	富山県氷見市上田	一四・〇〇	二・六	
六	長崎県福江市野々切町(福江の大ツバキC)	一四・〇〇	二・四	県指定
七	茨城県日立市東河内町上水瀬 勝田方	一四・〇〇	二・四	市指定 樹齡四百年
八	鳥取県八頭郡佐治村津無	一八・〇〇	二・三	樹齡三百年
九	栃木県芳賀郡益子町益子	一八・〇〇	二・三	樹齡三百年
一〇	石川県河北郡津幡町笠池ケ原 笠野神社	一七・〇〇	二・三	樹齡三百年
一一	石川県七尾市小丸山第二公園	一三・〇〇	二・二	
一二	石川県七尾市熊淵町 武田方	一三・〇〇	二・一	
一三	山口県豊田郡神上寺	一三・〇〇	二・一	
一四	茨城県日立市石名坂町 大塚秀夫方	一三・〇〇	二・一	樹齡二百年
一五	宮城県亘理郡山元町高瀬	一三・〇〇	二・一	
一六	広島県神石郡三和町教西寺	一三・〇〇	二・一	地上三・四で六幹に分岐
一七	石川県珠洲市三崎町宇治 本竜寺	一三・〇〇	二・一	
一八	和歌山県和歌山市東山 東木枕	一三・〇〇	二・一	県指定
一九	長崎県福江市野々切町(福江の大ツバキB)	一三・〇〇	二・一	県指定
二〇	石川県加賀市塩屋町鹿島の森	一三・〇〇	二・一	
二一	長崎県壹岐郡石田町筒城仲触 平田方	一三・〇〇	二・一	
二二	長崎県壹岐郡芦部町釘の屋触 日高方	一三・〇〇	二・一	
二三	石川県羽咋郡富来町大福寺	一三・〇〇	二・一	
二四	広島県世羅郡世羅西町	一三・〇〇	二・一	
二五	石川県羽咋郡富来町酒見 小橋方	一三・〇〇	二・一	
二六	石川県鹿島郡鳥屋町瀬戸	一三・〇〇	二・一	
二七	長崎県福江市野々切町(福江の大ツバキD)	一三・〇〇	二・一	町指定 地上1・2で三岐
二八	茨城県高萩市秋山 沼田方	一四・〇〇	二・一	県指定
二九	石川県河北郡高松町内高松 八幡神社	一四・〇〇	二・一	県指定 地上2・0で二岐
三〇	愛媛県伊予三島市富郷下猿田町 熊野神社	一五・〇〇	二・一	県指定
三一	愛媛県伊予三島市富郷下猿田町 藤原方	一五・〇〇	二・一	地上3・0で三岐
三二	長崎県壹岐郡石田町石田東触 松本方	一七・〇〇	二・一	県指定
三三	鳥取県東伯郡三朝町福本	一七・〇〇	二・一	
三四	石川県加賀市横北町 白山神社	一七・〇〇	二・一	
三五	茨城県高萩市秋山 沼田方	一七・〇〇	二・一	
三六	石川県河北郡宇ノ気町谷 亀田神社	一七・〇〇	二・一	
三七	石川県河北郡宇ノ気町横山 賀茂神社	一七・〇〇	二・一	

単位メートル

適地適木調査と植生

井幡清生

もう三十年以上も前のことになりましたが、当時私は、県の職員として森林の土壌調査を担当し、連日山の中を歩きまわっていました。

適地適木調査で

熊にぶつかる

その内容は土壌の構造、深さ、堅さ、透水性等を調査し、併せて傾斜の度合、方位等を参考にしながら、その土地にどんな樹木を植栽したらよいかを判定する、いわゆる適地適木調査であります。

調査はかなりの強行軍で、一日平均約十五キロ、多い時は三十キロ歩いたこともありました。

当時は現在のような車社会でなく、朝早く宿を出てから、現場まで一時間や二時間かかって、歩いてたどりののが普通でした。

現場で待ち合せの地元の案内役とおち合って、地図を拡げてその日一日の段取りを打ち合せてからいよいよ山へ入ります。調査の性格上、山道ばかり歩くわけには参らず、地形にしたがって谷から峰へ、尾根から沢へと、生い茂る灌木や蔓をかきわけかきわけ、それこそ熊のように、

山の中を歩きまわりました。そうそう、熊といえば、調査の途中で熊と出合ったのも、二度や三度のことではありませんでした。その日は初夏のよく晴れた早朝でした。今日は強行軍ということで、朝六時頃に宿を出発し、山道を歩いていました。蜘蛛の巣を払いながら五メートルほど前を歩いていた案内役の人が、突然立ち止まって私を制し、エヘン！エヘン！としきりに咳ばらいをします。

何事かと恐る恐る近づいて見ると、二・三十メートル先の朝靄の中を、二匹の熊が山の急斜面を駆け上って、林の中へ消えて行くところでした。それは仔づれの母熊で、道端のヤマゲワの実を食べていたもので、仔づれの熊は警戒心が強く、驚くと人にも向つてくるので危いところだつたと言ふことでした。話を聞いて、冷や汗が腋の下をスーッと流れおちるのが、はっきりわかりました。それから数日間は、熊のことばかりが気になって落ちつかず、そわそわしながら調査を進めていきました。

図鑑と首つ引きの植生調査

土壌調査と同時に、植生の調査も

義務づけられていました。調査孔を掘るたび標準地を設けて、そこに生育している植物の種類や、種類ごとの出現頻度を調べました。初めのうちは名前の判らないものが大半で、採集しては胸乱につめ込んで持ち帰り、宿へ帰ってから深夜まで図鑑と首つびきで調べてみましたが、それでも判らないものが多く、図鑑で調べるとは素人には容易なことではないと痛感いたしました。それでも自己流に命名し、念のため腊葉をつくって、後日里見先生に診断をお願いしたところ、三分の二位は正解で安堵したことを覚えております。調査を始めて二年位経ちますと、植生調査も大分慣れてきまして、その頃から土壌の乾湿や尾根筋、沢筋または斜面の方位と、出現する植物の群落とに、かなりの相関があることに気づきはじめました。

例えば同じ標高・傾斜でも、西向きの斜面ではコナラが優占種となりますが、東向きの斜面では、特に優占種的な樹種は出現せず、クリ、カエデ、サクラその他色々な樹種のまざった林相となります。

また、ホオノキがよく生育している所は、理学的に富んだ土壌が出現し、スギの造林適地と考えても良いようです。一般にシダ類は、土壌の良し悪しの判定によく使われますが、

コシダは腐植層がほとんどない、かたくしまった土壌の所に多く見られますし、ウラボシは腐植層は発達しないが、やわらかい排水の良い所で群落をつくるようです。またジュウモンジシダやリョウメンシダは、やわらかい腐植に富んだ湿りけのある土壌の所に、多く見られるようです。

調査結果わかった

指標植物

五年間の調査をとおして、土壌の乾湿の指標となりそうな植物を列記しますと、次のようなものがあります。

乾性土壌……アケシバ、ネズキ、レンゲツツジ、アセビ、タムシバ、リョウブ、マルバマンサク、ネズミサシ

弱乾性土壌……コナラ、ヒサカキ、イヌツゲ、コアジサイ、シシガシラ。弱湿性・湿性土壌……フサクラ、キブシ、サワアジサイ、カニコウモリ、ウワバミソウ、ツリフネソウ、ジュウモンジシダ、リョウメンシダ。

以上であります。しかし、種類だけのものでは、すべてを判定することは危険です。全体をよく観察し、生育状況や地形などを勘案しながら判断すべきであります。

(本会副会長・県森林組合連合会)

庭の中の“国宝”

兼六園

下郷 稔

兼六園の沿革

△はじめに▽

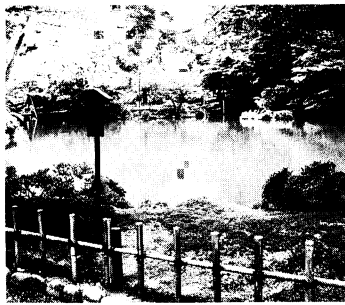
私たちの住む、すぐ近くに庭の中の国宝である特別名勝・兼六園をもっている。しかしながら石川県の人たちはあまり兼六園を知っていないのが実情のようだ。

年間、三百万人近いお客様を迎えている兼六園へ、遠来のお客様などと共に入園する機会も多いことと思う。その際、兼六園のおおまかな沿革やたずまいについてご案内できたら、さぞかしお連れしたお客様は喜ばれることだろうし、“さすが石川の人だ”と尊敬もされることになるだろう。

そこで、三回にわたって「庭の中の“国宝”―兼六園」と題して拙文を載せ、読者の皆様が兼六園をご案内されるときの手助けをしたい。

△蓮池庭▽

兼六園は外様大名の最大の雄藩、加賀・前田家の城に属す外庭であった。それとともに、最も弱いとされた小立野方面からの敵の侵攻を防ぐための外郭の役割ももっていた。



瓢池(旧蓮池庭)

兼六園の作庭がいつの時代から始まったのかについては、これまでいくつかの説があったが、いまは五代藩主綱紀が現在の噴水の前あたりの相当広い敷地に蓮池御殿という別荘をつくり、その別荘の周辺に庭づくりがなされた延宝四年(一六七六)とみているのが一般的である。

まず、庭づくりが始まったところは、兼六園の西南部、現在の瓢池から桜ヶ岡あたりの傾斜地である。

延宝六年(一六七八)の記録によると藩主綱紀は、泉水際の数寄屋(茶室)に老臣たちを招き口切り茶会を催している。この泉水際の数寄屋とはいまの“夕顔亭”の前身にあたるもので、この茶室のほかにいくつかのお亭もあった。“黄門橋”も

この時代に架けられたものと見られている。

この時期の園名は“蓮池庭”と呼ばれていた。

蓮池御殿とその庭・蓮池庭は、藩政時代最大の火災“宝暦の大火”(宝暦九年―一七五九)で、ことごとく燃えてしまった。この大火は城下一万五百八戸を焼き、金沢城も灰燼に帰してしまったのである。

その後、十年余りの間“蓮池庭”は荒廃したままとなっていたが、十代藩主・重教、十一代藩主・治脩は、復興にとりかかった。安永三年(一七七四)には、いまにみる翠滝が完成し、夕顔亭もできあがった。寛政年代(一七九〇年代)に画かれたと見られる“蓮池庭之図”(写・兼六園管理事務所所蔵)によると、蓮池庭には、夕顔亭のほか高之御亭、内橋御亭、舟之御亭の計四つの御亭があり、参勤交代の下街道であった黒部川上流の橋、愛本の橋を模した刎橋も白龍湍にかかっていたことを知ることができる。

いまにみる瓢池周辺の基本的構図は、このときにできあがったものといっすよい。

△千歳台▽

私たちが千歳台と呼んでいる小立野台地につづく東南部の平坦地につ

いては、初代藩主・利家が入城したあと、まず宝円寺や波着寺が建てられたが、その後、七人の老臣に屋敷地を与えたり、藩校として文武の二校(明倫堂と経武館)が設置されるなど多くの変遷を経ている。文政五年(一八二二)には十二代藩主斉広の隠居所としての“竹沢御殿”が建設された。この御殿は建坪四千坪(二万三千平方メートル)、部屋数二百室を超える豪壮で華麗な建物であった。しかし、御殿の完成後わずか二年で斉広はこの世を去ってしまった。十三代藩主となった斉泰は、順次、御殿をとりこわしながら、霞ヶ池を三回にわたって掘り広げ、曲水を巡らした。御殿の完成後、およそ三十年でその御殿は完全に姿を消してしまった。兼六園の全体像は十三代藩主が完成させたのである。

なお、竹沢御殿の古材は文久三年(一八六三)に建てられた十三代藩主の母にあたる真龍院の隠居所の用材に使われた。

園名を“兼六園”と命名されたのは、竹沢御殿完成の年と同じく、文政五年(一八二二)であるが、この詳細については次号でふれることにしたい。

以上が兼六園の藩政末期までの極めて簡単な沿革である。

(石川県兼六園管理事務所)

珠洲市指定天然記念物

(写真 田中 敏之)



愛宕神社のスギ

昭和四十一年一月七日指定
珠洲市宝立町春日野
(所有者又は管理者) 愛宕神社
幹周 七・〇メートル
樹高 二六・〇メートル



高倉彦神社社叢

昭和三十七年二月十三日指定
珠洲市蛸島町レ部一三六
(所有者又は管理者) 高倉彦神社
面積 一〇、〇〇〇平方メートル



徳保八幡神社社叢

昭和三十七年二月十三日指定
珠洲市高屋町
(所有者又は管理者) 徳保八幡神社
面積 三五ヘクタール
タブーイノデ群集



新宮神社のスギ

昭和四十八年六月五日指定
珠洲市若山町大坊一七部九〇
(所有者又は管理者) 新宮神社
幹周 六・三メートル
樹高 三〇・〇メートル



黒峰の林叢

昭和四十一年一月七日指定
珠洲市若山町南山(宝立山)
(所有者又は管理者) 南山区有
ブナ・チシマザサ群集



畑中家のネズ(ネズミサシ)

昭和五十二年八月二十二日指定
珠洲市馬縷町(山中)
(所有者又は管理者) 畑中和男
幹周 三・五メートル



石田家所有のタブノキ

昭和五十二年八月二十二日指定
珠洲市大谷町(山中)
(所有者又は管理者) 石田為四郎
幹周 六・八メートル
樹高 二〇・〇メートル

第三回巨木を語るう 全国フォーラム

第三回巨木を語るう全国フォーラムは、四月二十八日に加賀市文化会館で開催された。北は北海道、南は九州からの同志の方々約七百名が参集して九時半、多田勇巨木フォーラム加賀実行委員長（加賀市助役）の開会宣言により開幕した。

まず主催者側として中西石川県知事から「子供のころは大変お宮やお寺に巨木が多かったが、開発などでいつのまにやら消えたものが多い。大変残念だ。そうした中で、巨木を守ろう、語ろうという運動には大変喜んでる」とのあいさつのと、矢田松太郎加賀市長から同じく主催者としてまた地元開催地としての歓迎のあいさつがあった。次いで同じく主催者として石川県巨樹の会々々長里見信生氏からも、別掲の通りのあいさつがあった。

なお、来賓の森喜朗衆議院議員、環境庁長官（代理）、林野庁長官（代理）からそれぞれ祝辞があった。

十一時から加賀市出身の作家高田宏氏の「森と人間」と題する基調講演があり、午後一時半から「全国の巨木は今」を共通課題とするパネルディスカッションが牧野和春氏のコーディネーターによりすすめられた。

里見 私は今日の天気から、昭和五十八年に石川県で開催されました第三回全国植樹祭を思い出しているのではありません。当日私は、この加賀市の塩屋海岸にご崩御遊ばされた昭和天皇陛下をお迎えいたしましたので、ご説明の大役を果させていただきました。この地に昭和天皇をお迎えしたことは、この海岸にすぐれた植生があるからでございます。

本日この加賀市で第三回巨木フォー

ラムの会が開かれますことは、加賀市にスタジイの巨木が多いという特徴があげられます。スタジイは人が開発する前に、その原植生の大変大きな役割を果した樹種でして、それが色濃く残されているということに、加賀市の自然があるということに、換言すればなるかと存じます。そういうこの地で、フォーラムが開催できたことは、大変意義があるものと考えているのでございます。

西田 町の体育館主催でサンデーグリーン教室が昭和六十一年に発足し「健康はまず歩くことから生れ、野辺の草花から天然記念物まで自分の足で探究し……」という趣旨に私は賛同して参加しました。学級生一四〇名、常時出席八〇名。毎月第一日曜日に例会。例会以外に特別学習で、昨年は富山、石川県（栢野大杉、八幡神社大杉など）を回ってきました。また年間のしめくりに記念植樹をしています。こうして次第に巨木にひかれるようになりました。

人間が木に対し語りかけずとも、木の方から語りかけます。これからは、木々の言葉に耳を傾けながら歩いていきたいと思います。

齋藤 市の町づくりの目標は「水と緑と花で、安らぎのある町を二一世紀に作りあげる」ことです。町にはゴルフ場一つなく、今後も森をなくしてゴルフ場を作ることはありません。と思います。

二十ヘクタールの市有林を永久に切らない森「不伐の森」とし、巨木の森を森の遺産として後世に残そうという森林組合長の提案がもとで、

平成元年三月に「長井市不伐の森条例」ができました。

私は、森林を育てるために指導する指導員を、地域であれ国であれ育てなければならぬのでないかということを提案します。

平岡 方々の巨木の絵をかいているうちに、木が傷んでいることがつきましました。有名な巨木が小学生や中学生の火で燃やされたり、雷にあたりしています。

そこで何か言ってやらなければと私の絵をかく立場で木のことを訴えてみたいと思い、私の画集や絵ハガキを買って下さいといったのです。その金で、巨木にやる肥料を買うか、あるいは避雷針をつけることを訴えましたところ、非常な反響がありました。

川上 私が巨樹老木に興味をもったのは、関右馬允という人が大正末から昭和初期にかけて、精力的に巨

パネリスト

西田 杜枝	主婦・奈良県香芝町
齋藤伊太郎	市長・山形県長井市
平岡 忠夫	画家・元東京都浄水部長
川上 千尋	ひたち巨樹の会代表・茨城県
安藤 久次	広島大学名誉教授
里見 信生	石川県巨樹の会々々長・前金沢大学教授
牧野 和春	エッセスト・東京都

— 敬称略 —



樹老木の探査につとめ、それを昭和十五年に発行した茨城県巨樹老木誌上下二巻にまとめたものに興味をもったからです。

その後それらの木がどうなったかを私が調査したところ、約半分が枯れたり、枯れかかったりしていることが判りました。残っている巨樹は今、貴重な存在になっています。

「ひたち巨樹の会」は、こうした先人たちの巨樹の会への思いを再確認して発足しました。会の活動としては巨樹の写真展、講演会、観察会、研修会などを行い、この中で巨樹の大切さを生かしています。

私は教員をしていますから、これから学校教育に巨樹との心を生かしたいと考えています。

安藤 植物は、無限に伸びていくという力を持っています。何百年あるいは何千年にたった木でも、その先端は若い木と同じように若葉を出し、花を咲かせそして実を結びます。

私たちはあの大木、例えば山梨県武川村山高の神代ザクラという日本一のエドヒガン、あるいは石川県白峰村にある太田の大トチは、根元がもう洞穴のように朽ちかけているのに、何と枝の先の方には立派な花を咲かせ実をつける。それを見たときに私たちは、その数百年、数千年を経た巨木から、いかに植物の命というものが強いかということを感じずにはいられないと思うのです。

ところが残念ながら動物私たちの年老いたものは、若さを咲かせようと思っても、なかなか実を結ぶところまではいかない。そういう宿命をもって生れてきているのですが、心の中にはそういうふうな植物のような生き方ができると思うのです。

その考え方として、心の中に巨樹を生やせということ。そうしますといま体の中に大きなサクラが茂っていると、もし胃ガンを胃を取ってしまったら、サクラの根元がガバツと洞穴になってもサクラは花を咲かせるように、どこかで花を咲かせようとしています。

それで皆さんも一つそのように、

いつも何かのときに心の中に大木を見たときには、その大木を自分の体の中に吸収してしまう考えをもちましょう。私は最近そのような考え方をもちまして、何か生きていることが、はつらつとしてくる感じがいたします。

里見 一言提言をさせていただきます。国の天然記念物の指定は、官庁でいいますと文化庁の管轄でございます。今回の第三回フォーラムにおきまして、環境庁と林野庁の方はお見え下さいましたが、文化庁の方はお出になっていません。

私共の第三回のこのフォーラムにおきましては、それがなされておりません。来年度の第四回静岡県浜南町でやられますフォーラムにおいては、文化庁が入って下さることを努力していただきたいと思います。

最後に、私共の石川県巨樹の会というのは設立して漸く一年となったばかりでありまして、県民のご関心は大変なものであるということ、身に染みて感じているのでございます。県単位としてのこういう巨樹の会は、本県が最初であるということでございます。

願わくば私共が、水面にポンとほり込んだ一つの石が広がって、各県で「巨樹の会」というのが

設立されることを望みたいと思いません。それが更に力を合せることによって、国全体としての「巨樹の会」に育っていくことをお願いいたします。

牧野 「全国の巨木はいま」という共通項目で沢山の問題提起がありました。

巨木と人間とのかわりを考えてみますと、どうやって守っていくか環境としても守らねばならぬ。行政上の工夫も必要だ。教育の現場においてもそうだ。家庭なら社会、そういう社会全体の認識、また生物の会とかいろいろの団体とか、志を同じくする外の団体との交流、意見交換、そういう全体の相乗効果によって巨木を守ろうというものを発展させなきゃいかん。

それから巨木を守ろうという一つの啓蒙的などころから一回二回三回とこまできました。これを全国的な運動として更に輪をひろげ、厚味のあるものにしていくという路線の流れと、三回目にしてこのごろ実践的な動き、芽ばえが出てきたのではないか。問題は啓蒙的な横に広がっていく部分と、我々の工夫によって行政と一体となって中身のあるものに、質の高いものにしていく実践の部分と、これを全体を考慮したダイナミックな今後の展開といったことが期待されてきたようです。

巨木を守る心に感激

宮腰 はま子

加賀市市民会館を会場として開かれましたフォーラムに参加し、数多くの事を学び、また感激しました。高田宏先生のお話しにはとても親しみを覚え、改めて木の存在観は如何なるものかを再認識しました。

会場二階の絵画

巨木フォーラムと探訪会に参加して

展、写真展は、私にとつて今までにない素晴らしい出会いでありました。一緒に竹上さんと絵画展を見ている時、気軽に私達に近づいてご説明下さったのは「巨樹千枚を指す」画家平岡忠夫先生でした。一枚の絵を指して、「これは今朝四時に起きて現地でスケッチして仕上げたものです」と……。それは地元加賀市小塩辻の十村屋敷跡、スタジイの巨木でした。筆のタッチもあざやかな巨木、今ここで息づいているかのような錯覚さえも感じて見入りました。「絵を書くということ、毎日が生きているということですよ」。展示されている数十枚の絵について

もいろいろな出合いを話して下さいました。

私は元森林組合長さんが「樹木の伸びに日々を生命を感じる」といっておられたことを思い出し、今さら生きていることの素晴らしさに胸のあつくなる思いでいっぱいでした。

写真展は、全国の巨樹、石川の巨樹名木、合せて二百余枚。

一番先に目についたのは、やはり私の地元輪島市の巨樹、三井町内屋、滝尻家の「四本立のスギ」でした。なにか誇らしい気持。次いで奥能登の巨樹の数々。どれも長年の星霜に耐え生きぬいた力強い生きざまを見せていました。

午後からのパネルドスカッションでは、諸先生からの御意見を拝聴して深く感激を覚えました。

とくに山形県長井市の「不伐の森」について話された市長さんのお話は、「不伐の森として、市民の永久財産としてこの森のみどりを後世に残し未来を託すものにした……」との趣旨にそって市有林約二〇・三ヘクタールを保護育成するという計画でした。素晴らしい計画でした。

昨今、村おこしとしての山村開発が行われ、里山の自然も刻々と姿をかえようとしています。多くの人々

が長年かけて今の姿をつくり、山々の緑が守られてきたのです。なんらかの都合により、一瞬に姿をかえるのはしのびがたい気持です。

私の住む輪島は、県下きつての林業地。多くの美林に囲まれ、毎日のどかな日々を過しております。今の地にも、開発の音が少しづつ聞えてくるようになりましたが、この美しい自然をいつまでも残してほしい

巨樹探訪(Aコース)

上保 槇子

曇り空を気にしながら、加賀市中央公園をバスで出発。

車中は県外からの男性方が多く、女性はわずか。

このような会に初めての参加で、とても不安であったが、係りの方の親切な案内、全国からお集まりの方々の方言をまじえての話し合い。樹木に対してのお国自慢話などに、大変楽しく過ごすことができた。

見学箇所は、鹿島の森―実盛塚のクロマツ―御仏供スキ―石川県林業試験場・樹木公園―白山比咩神社の社叢―兼六園。

それぞれの場所では、幾多の風雪に耐えてきた巨樹の前に立ち、おのずから畏怖と崇敬を抱かざるを得なかった。

一番印象に残ったのは、『鹿島の森』だった。タブノキ、スタジイ、

と……。このような思いがあるので、なお先々のお話に心をうたれ同感すると共に、新たな感動が胸中を走ったのです。

巨木や緑を大切にとの趣旨のもとで集った人々に会い、旧知の人々との久方振りの出会いもあり、とても充実した一日でした。朝からの思いをたぐりつつ夕暮の家路につきましました。(三井森林組合・輪島市)

モチノキなど、その他の多くの樹木が枝葉を広げ、夏日をさえぎり、また、すごく大きな木のほら穴に、幼い時に読んだ『こぶとりじいさん』の雨やどりの話も、うなずけるのだった。

国指定天然記念物として、貴重な樹木が、良く保存されていた。木を愛する参加者の方々は、何か木と語り合っているような姿に、私自身、教えられるような気がした。日頃、樹木に無関心だった私も、この会に参加して、ほんとうによかったと思う。

「木への思いやり」を学び、自然保護を通して、巨樹を守り育てていかなければならないと強く感じた。身近に今、何ができるかをよく考え、大切な緑の地球を守っていきたい。

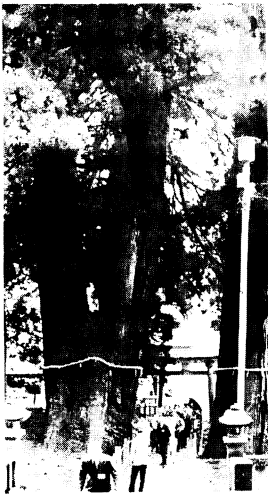
巨樹探訪(Bコース)

半部直之

朝から大変な雨であったが、私達Bコースのバスは予定通り出発。

第一番目に、山中町栢野の「天覧の大杉」にむかった。丁度降りる頃は小止みとなった。樹高三六・〇メートル(四・八メートル上って二岐)、幹周八・九メートルと枝葉が繁茂して空が見えない程大きい。このほか幹周七・六メートル、六・七メートルの巨木が立ち並んでいたが、境内、参道ともに掃き清められており、地元の方々の崇敬の念に感心しました。

再びバスに乗ると皆んな打ち解けて順次、自己紹介が始まった。地元の方が半分、あとの半分は県内と県外の方であったように思う。



「このフォーラムに参加して感動した。より一層郷土の緑を守らねばならない」。大阪市、大垣市の方からは、「全国的に緑が失われてきているのでこの機会を契機として貴重な財産を皆んなで大事にしていこう」。

国立病院の元院長さんからは「退職後、自然をまわって楽しんでる」等の話がでた。私は町の自慢としている常椿寺の大藤を紹介した。

次に鹿島の森に着いたときは雨も上がった。この地は陸続きだが、周囲五〇〇メートル、高さ三〇・〇メートルの小さな島のようなのである。さすが国指定だけあって八幡神社の神域のタブノキ、ヤブニッケイ、スタジイの巨木群は神々しかった。

三番目は小塩辻の十村屋敷スタジイ巨木群(市指定)を尋ねた。ここが農事遺書で有名な鹿野小四郎の屋敷跡で、幹周一〇・五メートル、八・六メートル、五・六メートル、四・〇メートルのスタジイの巨木に囲まれていた。説明の方から用水路開削、新田開発、砂防

林植栽等の指導があり祖先代々恩情をうけた遺徳を偲

んでいるという話があった。

最後に有名な美盛塚のクロマツを見学した。木曾義仲と斎藤別当美盛の話に源平の戦いを思い出した。

鹿島の森とタブノキと

永島 治

バスの窓から遠くに見える鹿島の森は、照葉樹の濃い緑とケヤキの新緑がくっきり分かれて見えた。到着して鳥居をくぐり坂路にかかると、空は高低の木々の枝葉にさえぎられて、稍など見えそうもなく、ただほの暗い。これは人間が平野を開拓してきてわずかに残った緑の自然で、人間自身がこのように押しつめられてしまったものを、はるばる訪ねてきて懐かしむのは、我ながらなんとも不思議な気持である。

はるか昔、縄文海進の時期には、この海辺にもタブノキ等の照葉樹が茂っていたと言われ暖流の置きみやげか鳥たちの運んだものか。北上してきた樹木の子孫がここに静かに立っている姿は、長い歴史を秘めていて、その木肌にそっとふれて無言の挨拶をかわした。

島の南側の北潟の水面にかかった板橋を行くと、タブノキの枝が目の前に伸びていて、枝先ごとに大きくふくらんだ芽がはじけ、浅緑のこつ

塚は方形の台地をなし一・〇メートルの高さがあり、クロマツの枝ぶりのよさ、色合い等に武将の気品を感じた。(鳳至郡能都町)

ぶの蕾が多数こぼれ出し、その中に生まれたてのあどけない葉が、つややかな色合で潟のさざ波に映えていた。

タブノキは、金沢の町の方々にあって、例えば本多町から小立野への大乗寺坂の登り口にも大木二本が対立し、まるで巨大な門柱のようにあたりをとり仕切っている。坂の中ほどにベンチがあり、白山連峯を遠望できて、ここは車の騒音もなく、ただ木々の緑のささやきのみという所。

また、その近所の本多町二丁目には、初代本因坊日海が開いた本行寺があり、その墓地は小立野の裾斜面のタブ、ケヤキ、ヤマモミジ、ツバキ等の林の中にある。その奥の小高い草むらに、七重石塔が立ち一帯を見守っている。木洩れ日のゆるるこのお墓にねむっている人たちはしあわせそうな、などと言うのは、行年七十五歳わが老の独り言。

巨樹の会には、乏しい私の余生に貴重な楽みを与えていただき深謝しております。(金沢市額新町)

十村屋敷跡のスタジイ巨木群

中池 四郎

第三回「巨木を語ろう全国フォーラム」が加賀市で開催された折、見学地の一つに十村屋敷跡のスタジイの巨木群が選ばれたことは、この近くに住み毎日見続けている私にとっても、また巨木群を村の誇りとしている村人にとっても、ことのほかうれしいことであった。

開催当日の早朝、デイスカッションのパネリストの一人、巨樹千枚画くことを目指す画家平岡忠夫先生がこの木を画きにこられ、二本が二枚の画となり先生の目標千枚に加えられるとともに「巨樹絵画展」に開催地元の巨樹として急拠追加展示され会場を飾った。分厚い日本紙にたっぷり墨を含ませた葦ペンで筆勢溢れる力感に満ちた絵はその折々の巨木の表情を瞬時にとらえるためのすごい早画きの人であった。見に来た村人にも葦ペンの手を止めることなく、巨樹と人とのかわり、巨樹の傷つき枯死への痛みを心を込めて語られた。巨樹を愛し抜群の行動力を持たれる先生との出会いも、この木がもたらした「ご縁」にはかならずと思

う。十村屋敷跡というのは、十四代も

続く、代々十村役を勤めた旧家鹿野家の所有地で現在無住の屋敷である。同家に現有される古文書によれば、初代小四郎が今から約三百年前の元禄六年（一六九三）大聖寺藩の命によって、御目付十村として越前境吉崎村から遣わされ、先に住んでいた五兵衛という人の屋敷、田畑、山林、使用人一切を、代銀一貫目で藩から無利子五カ年賦の条件で貸付をうけ、ここに居を構えた屋敷の跡である。

スタジイ巨木群のうち幹周の大き



十村家敷跡のスタジイ

い（一〇・五メートル。八・六メートル。五・六メートル。四・〇メートル。三・三メートル）五本は推定樹齢七百年以上とされているから、初代十村赴任のときすでに樹齢を重ねた巨木であったのであろう。また、ここは通称馬駆場とも言われている。当初の屋敷面積千二百坪余は、現在は三百坪である。馬場、的場、矢竹藪等があつて馬場は屋敷外に延び、その長さは三百余間あつたといわれる。馬場が馬駆場の呼称のもととなったのである。

村に公民館が建てられたとき、十村屋敷の所有者鹿野さんから一部を借りて駐車場を設けることになり、一部残っていた両側土囲い堀状の馬場は埋め立てられてしまった。村人の暮らしの必要から、この巨木の生育環境に影響を与えたことであらうし、主要県道に面する樹はその拡幅側溝整備のため、相当量の根土が削り取られ、コンクリート擁壁が打ち込まれた。樹冠が大きいので県道上に張出している。送電線と重なる部分があつて、特に冬期積雪の多い時は枝が下垂することがあり、保護上の問題となっている。樹を守るには、平岡先生のいわれたように電線の地下埋没が必要なのかも知れない。大樹三本は、それぞれ人が入れるほどの空洞となっているので、もし火気に触れた空洞が煙突となって大惨事になるかも知れない。

暮らしとのかかわりで心配なことも多いが、村では年頭の初寄合いで天然記念物文化財保護を確認事項の一つとしている。地元小学校の探検グループが樹を見上げたり、幹に触れたりしにくる。保育園児の「権の実ひろい」もある。公民館行事の「ふるさと探訪」にもこの巨木群の見学にやってきた。

余りに樹高が高いので、五月下旬から六月にかけての黄金色に輝く新緑と樹冠一ぱいの花穂に心を留める人は少ないが、私は古木の若さに溢れる「華やき」もまた好きである。

（加賀市小塩辻町）

幻の樹木物語 (3)

高尾町のユーカリノキ

長谷川 義法

金沢市の南部、高尾町の旧鶴来街道沿いに、オーストラリア原産のユーカリノキの原木が生育していた。この木は、通称六右衛門と呼ぶ同町の旧家富樫忠氏の先代政治が、大正十二年ころ大阪の花木市場で二本の苗木を求めて植えたものである。

うち一本はほどなく枯死したが、残る一本は昭和六十年ころまで、樹齢六十年余を勢よく生育し、生育の北限といわれる当地で、驚くべき生活力をもっていた。

昭和二十五年九月三日のジェーン台風で梢が折れたこともあり、樹高はさほど高くはなかったが、幹は大人の一抱え以上もあった。

それが残念なことに、昭和六十三年ころから衰弱し、上方から次第に枯れていった。それでも「ひこぼえ」だけが幾分生氣を保っていたので、これに望みをかけていたが、とうとう全部枯れてしまった。

わが国に初めてユーカリノキが渡来したのは明治八年ころといわれているが、その経路は明らかでない。それ以後何回か輸入されたが、これらは海外に渡航した邦人が帰国の折に、早く大きくなる木、珍しい木

として種子を持ち帰ったもので、東京以南の関西、中国、九州の庭園、学校、公共施設等に植栽された。

戦後ユーカリノキは、昭和二十八年八月に時の吉田首相のお声がかかり、木材資源の増産を確保する一環として造成することが図られ、同十九年度には石川県でもユーカリノキの森林造成試験が実施された。

わが国に生育しているユーカリノキの品種は十二品種。このうち九五%がグロブラスで、高尾町のもものがグロブラスである。

枯死したものは樹高一〇・七メートル、幹周一三メートル、枝張り約七・〇メートルであった。

(石川県林業試験場)



春の山祭りに思う

唐川 明紀

三月は、草木の芽が萌えだしてよいよ生い茂る季節だから、別名弥生ともいう。

能登地方では三月九日が春の山祭りである。この日は山を支配する神様が木の種を播くから、人が山に入ることを厳に戒しめて、これを犯せば事故災厄ありといわれている。山林作業従事者は、こぞって作業を休み、山の神に敬虔な祈りを捧げる習慣となつている。(秋は十二月九日)

万葉集にも「許太知之氣思物伊久代神備曾」とあるように樹木には神が宿っているから、妄りに伐採することを慎しむという古代からの麗しい民間習俗である。山祭りは、神官

が掌る神社祭祀と異って、社殿や祠のない特殊な祭りである。

この山祭りも近年は、本来の山の神を尊ぶという真髓からやや逸脱して、専ら飲酒が目的のようになってき

たことは、つつしまなければなるまい。

皇居の吹上御苑には、樹齢四百年を越える老木がうっそうと茂っている。昭和三年ここにゴルフコースを造るため、椎の原木を伐採中に人が事故死したので、それ以来皇居でも山祭りを行うようになった。しかし、我々民間の山祭りとは違って甚だ歴史が浅く、戦争中は中止されていた。それが戦後昭和二十二年に、このゴルフコースを拡張するにあたり樫の原木を伏採中、再び事故が発生したので、昭和天皇のおぼしめして山祭りを復活することとなった。皇居の山祭りは毎年二月十二日だときいている。

近頃、加賀も能登もゴルフ場造成がブームで、一大機械力で見える見るとちに大森林を瞬時に伐り倒す。かかる巨大機動力を駆使すればするほど、山の神の怒りは山の下に住む多くの人々のうえに災難として押しよせてくるのでなかるうか。

(元皇居守衛・加能民俗の会々員)

巨樹のQ&A

松を枯らす

恐ろしいマツノザイセンチュウ

向本 歓 寛

松は幼齡木及び老齡木、巨樹ともに、害虫、病菌、生理障害等によって枯れることが多い。そのうちで現在最も被害の大きいのは、松の材線虫病である。松の材線虫病は、体長一ミリにみえない小さなマツノザイセンチュウと、この線虫を運ぶ媒介者である体長三センチのマツノマダラカミキリによっておきるものである。

マツノカミキリがセンチュウを運ぶ。

六月から七月にかけてマツノザイセンチュウの被害木で羽化したマツノマダラカミキリが、体一杯にマツノザイセンチュウをつけてほかの松に飛び移り新しい枝をかじる。するとマツノマダラカミキリの尻からマツノザイセンチュウがたくさん出てきて、枝のかじり跡から松材の内部に潜入して増殖し、材の養分を吸収して松を枯らすのである。

これを防除するには、マツノマダラカミキリとマツノザイセンチュウとを区別して防除する必要がある。

マツノカミキリの防除

まず、マツノマダラカミキリに対

しては、六月上旬から七月下旬のザイセンチュウをかかえたマダラカミキリが、新しい松の枝を求めて外に飛び出すころ、セビモール、スミパイン等を空中または地上散布をして防除する。

また、松の枯損木については、十月から翌年三月にかけて伐倒し、枝幹とともに七・五号乳剤やパインサイド油剤等を散布して材の内部に潜り込んでいる幼虫や蛹を防除する。

マツノザイセンチュウの防除

次に、マツノザイセンチュウに対しては、十一月上旬から三月中旬にかけてグリーンカードエイト、センチュリー等を樹幹に差し込んで注入する。

松の異状発見がポイント

いづれにしても松の巨樹、老木、名木等が樹木の衰弱、葉色の变化、枝先の枯死、樹幹の剥皮、虫孔、腐朽がないか、異状の発見に気をつけて、もし異状を発見した場合は、速やかにそれぞれの処置、手当を施して、いつまでも生育するよう保護していただきたい。

(日本の松の緑を守る会評議員)

病害虫診断の

予備知識

松 枝 章

空高く伸びた巨樹の下に佇むと霊気を感じ、自然と頭が下がります。

しかし、これら高木が変調を来しますと、目さえ届かぬ高さのため原因の診断や確認、防除等に困ることが多いようですが、上へ登らなくても判断できます。

老大木を今後とも健やかに愛護して行くために、今回からこれらの予備知識を記して参考に供します。

根元からしつかり見る

樹木が枯れたり衰弱した場合、その進行の遅速から、一般的に急激なものには害虫、次いで病気、更に遅いものは生理障害と言えましょう。もちろん、「弱り目にたたり目……」の例えのように、最近は特に複合的、相乗的な被害も少なくありません。

まず、以上の事を念頭において、

- ① 樹種(適地か、土壌の乾・湿等)
- ② 植栽時期(生理的な植え傷みはないか)……を確かめ
- ③ 主な原因は何か(最も問題)
- ④ さしあたりの対策・処置
- ⑤ 恒久的な対策・処置……等を考えて行きます。

一目瞭然な病害虫の場合は簡単ですが、判断に困る時は、①②③を順に確かめ、運搬途上に衰弱したものや、不適時期の植栽、粗悪土の埋立地という場合、あるいは、客土を厚くして酸欠を招いたという事もあるようです。

樹種の特性を知る

取分け、樹種特有の性質(陽陰性、乾湿地性、潮・煙の耐性等)をあらかじめ熟知しておくこと、より正しい判断が早く行えるでしょう。

この点、庭木だけでも樹種が多く大変ですが、楽しみでもあります。

植栽時期はどうか

植栽方法や時期については、経験で体得するのが最良ですが、今一度次の点を確認します。

(1) 植穴が壺状となつて水が溜っていないか、(2) 根鉢と植栽地の土質の差が極端に違わないか(大差のある場合、土粒の毛細管現象で、根鉢の水分が取られ恒常的に乾燥する。この場合、根鉢をこわして植え直すとうい)

言うまでもなく根があつての植物ですから、根が活力を持って十分活動していなければ、弱り目にたたり目、生理的な衰弱はもちろん、いろいろな病気にも侵されやすくなります。以下、次号へ続けます。

(泉鶴来林業事務所)

また見付かった巨樹 (3)

提供者 金沢ナカオ山岳会代表

林 正一

場所 高三郎山 クラコシ尾根(犀川国有林)
樹種 ヒノキ A
幹周 五四〇センチ 樹高 一七メートル



秋季巨樹探訪の会

月日 九月十五日(土)九時から
場所 県庁―気多大社社叢(羽咋市
寺家町)―浄蓮寺のイチョウ
(志賀町北吉田)―県林木育種
場(志賀町火打谷・中食)―
鹿島路のタブノキ(羽咋市鹿
島路町)―鎌ノ宮タブノキ
(鹿西町金丸)―県庁

集合 当日九時までに県庁裏(テニ
スコート前)に集合し、ここ

会費 申込 参加希望者は八月三十一日ま
でに住所氏名とバスまたは自
家用車利用の別と集合場所を、
事務局へお知らせ下さい。

その他 中食は各自持参された
い。また、都合により一部自家用
車に相乗りをお願いのこともあ
ります。

から往復バスを利用します。
能登方面の方は、十時までに
気多大社に集合されても可。
往復バス賃三千円の予定。

樹種 ヒノキ B
幹周 三三〇センチ 樹高 一五メートル



樹病と保護に 関する研修会

樹木の心材腐朽の原因を探り、そ
の保護対策についての研修会を左記
により開催いたします。研修会参加
ご希望の方は、八月十日までに事務
局までお知らせ下さい。

日時 八月二十四日(金)二時半から
場所 白嶺会館(金沢市石引四―十
八―一。石川護国神社境内)

講師 赤井重恭・京都大学名誉教授
外に本会樹木診断専門委員
なお、「兼六園ケヤキ治療」のビ
デオの映写も行います。

巨樹名木の診断

本会では巨樹名木の保護のた
め、罹病している樹木の保護診
断を行うことになりました。該
当樹木がありましたら樹種、場
所、所有者、罹病の程度、連絡
先などハガキ等で事務局までお
知らせ下さい。

本会樹木診断専門員や専門家
に依頼して、診断していく計画
です。

平成二年度通常総会の概要

平成元年度収支決算

収入合計百三十七万一千円(会費八十万七千円、事業収入九万九千九百円、雑収入四十六万四千百円)
支出合計百三十七万一千円(事務費四十三万六千六百六円、事業費五十七万一千三百一十一円、繰越金三十六万九千八百三十三円)

平成二年度事業計画

会報年二回発行、巨樹探訪会年二回、フォーラム費用、巨樹に関する調査研究

平成二年度収支予算

収入合計百八十三万四千円(会費八十二万円、事業収入二十三万五千円、雑収入四十九万九千九百七十七円、繰越金三十六万九千八百三十三円)
支出合計百八十三万四千円(事務費三十万円、事業費百六万五千円、予備費四十六万九千九百円)

規約の一部改正
(加入) 第六条 会員になろうとする者は、加入申込書を会長に届けなければならない。また、会員の家族の入会希望者は申込書により準会員とします。

(退会) 第七条 会員は退会しようとするときは、その旨を会長に届けなければならない。また、会費を納入しない場合は退会とみなします。

石川県巨樹の会誌

二月六日 巨樹いしかわNo.2発送。
二月七日 フォーラムについて記者発表
二月十三日 気多大社の社叢林調査。調査員、里見、井幡、田中、外一名。

三月十七日 準備委員会開催。
四月四日 県、加賀市、本会でフォーラムについて協議。
四月六日 加賀市、同文化会館、県林試等に出張して準備打合せ。
四月十三日 実行委員会開催。里見、井幡、浅井委員出席。(加賀市)

四月十六日 平成元年度決算、二年度予算案、規約の一部改正案並びにフォーラムについて役員会開催。
四月十七日 濱野一郎代表監事、山辺直美監事による監査。
四月二十日 本会活動の実践化のため、公益信託TAKARAハーモニストファンドに活動助成を申請。

四月二十七日 フォーラム準備のため、加賀市へ里見、井幡、浅井、田中準備委員が出張。夕方、レセプションに参加。
四月二十八日 第三回巨木を語る全国フォーラムの開催

巨樹の会総会は会場を山代温泉協

会に移して開催され、来賓あいさつ(大幸県議会議員、斉藤環境部長)のあと上島保正氏を議長に選出し、第一号議案、平成元年度事業報告並びに、収支決算、第二号議案、平成二年度事業計画並びに収支予算、第三号議案、規約の一部変更が原案どおり可決承認。出席会員七〇名。

四月二十九日 大雨のため加賀市勤労者体育館にて行われたグリーンフェステバルに、加賀の行事に参加後、巨木探訪会を行った。参加者はAコース八二名、Bコース六四名。
五月一日 県関係者へ御礼挨拶。
五月七日 加賀市関係者へ御礼挨拶。
五月九日 里見会長は太田の大槨の国指定候補木調査のため白峰村へ出張。
五月十五日 TAKARAハーモニストファンド運営委員会から審査の上採択された旨、連絡が入った。
六月五日 TAKARAハーモニストファンド助成金(委託者宝酒造株式会社)の贈呈式は安田信託銀行京都支店で行われ、本会より里見会長が出席して四手井綱英同運営委員長よりこれを受領した。
助成は巨樹(林)、名木への触れ合い活動と実態調査を通じて保護対策を普及することに對するもので、金額は五〇万円である。

六月九日 読売新聞社金沢支社と共催で講演会と巨木写真展が行われた。講演会のテーマは「巨樹もろろ」講師は里見会長。参加者四十名。
新・日本名木百選と県巨樹名木の写真展は一週間行われ二六四名が会場を訪れた。
六月十日 美川町、藤塚神社の社叢林の保護診断。診断員田中敏之。
六月十六日 役員会を開催して、TAKARAハーモニストファンドについては巨樹名木の保護診断等に重点をおくこと。第三回フォーラムについては会誌の特別号発刊を計画すること。巨樹名木写真の貸し出しのこと等について協議決定した。
六月十八日 押水町の県指定妙法輪寺のナンテン、鹿島町の町指定、竜鬚カエデ、円光寺のキリシマツツジ等の保護診断。診断員向本、田中。

巨樹いしかわ第三号
平成二年八月一日発行
金沢市兼六元町十一番二十八号 (田中 敏之方)
石川県巨樹の会
電話 〇七六二一三一一〇五六一
郵便局口座 金沢三三三二四九番